九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

『東京日々新聞』における石炭関係主要記事(III)

斉藤,俊彦 NHK資料センター

https://doi.org/10.15017/13574

出版情報:エネルギー史研究: 石炭を中心として. 3, pp. 58-61, 1974-05-27. エネルギー史研究会

バージョン: 権利関係:

-7 東 京 日 Þ 新 聞 <u>__</u> K な け る 石 炭 関 係 主 要 記 事

東 (京日 明十三·四 · 七

の 坑 ○去る四日 (夫の死亡五十五人怪我六十人あり併しマブにハ少しも損害なしと 午前九時長崎県下高島石炭坑の第二坑中より瓦斯破裂し

電報あり

東 京 明十三·四·十七

県 H 坑 後藤象次郎 に記せしがいま長崎よりの報道を得たり同日急報の達するや折ふし ○去る四日 翌五日にハ全く平常に復したりと其の詳細ハ坑主後藤君より長崎 令 に赴かれまづ坑夫の死者を吊ひ傷者を療治し其の日の内に取片付 への 届 け書に詳しけれべ左に載す 君にハ長崎に居られしかバ直ちに数名の医師を伴ひて炭 高島炭坑にて坑中の瓦斯破裂せし事ハ電報に依りて前号

本月四 四 破裂の原因を探求するに該片盤の一隅にて甞て過量の瓦斯を噴出 島に在る病院又ハ各自の 迷狼狽して途を失ひ岩石等に衝突破砕せしものならん右ハ坑内よ 力に斃れ或ハ破裂後坑中に充塞する炭酸瓦斯の気烟に触れ又ハ昏]十七名坑用馬の死する八頭に及べり其死傷たるや盖し破裂の弾 ₹破裂し為めに坑夫門監等の即死する者四十七名疵傷軽重を合し 引揚るや直 日 午前九時高島炭山第二坑内蒸汽卸し東廿一片磐中より瓦 に出張巡査の検視を受け死亡ハ埋葬せしめ疵傷ハ同 納屋に送り夫る治療を致させ居候抑此

> 東京日 明十三・六・七

なく現に一

昨

朝より坑業に取掛り

申 -候云子 俊

斎

藤

彥

せし より 旋中のよし斯れバ美結果を得るハ応に遠きにあらざるべしと云ふ 石炭山の試堀とを併せて銅鉄石炭三鉱業会社を開設せんとて方今周 旧区長の滑川某ら外三十七名の金満家が奮発して同郡多賀郡の鉄 張ありて実検せられしに銅を十分に含有する由なれば是に気を得て 開鑿せしか凡そ百ヶ所ほども堀りし跡今にあり其後水戸領となりて ○茨城県下常州久慈郡御岩山の銅山へ元と佐竹領にて其頃 かバ山尾工部卿と工部大学校の鉱山生徒 弁に御雇外国教師も出 如何の訳にや長らく休業せしが今ど有志の尽力にて試堀を出願 盛んに Щ

東京日 々 明十三・六・九

日 テ ○当局所産コークス及コールター | 迄ニ入札書御差出有之度候也 約定取結度候間御望ミノ方ハ (横浜区住居ノ人ニ限ル)本月十五 ル満壱ヶ年間 一手売捌方入札ヲ以

但一品ヲ入札スルモ 御 覧可被下候 差支無之候尚約定書并入札手続等ハ来局ノ上

東京日 明 十三・七・廿

大猥り

Ø

明

治十三年六月九日

横浜瓦斯局

する部

たるを以て此の災害の原因と認め候尤も坑道へ聊かの損所も是れ

! 進入せしものにや災後其部中に一燈器と一坑夫の死體を見出し

分あり為に目標を取立て常に出入を厳禁したるに坑

るく随つて直段も下落したれバ其後ハ採掘せし石炭を山元に儲へ置 ○高島の石炭ハこの春より諸港に囲ひ置きの品多きより一 時 売口 わ

徳に運送せしとぞ其の代価 て売出 に付て予備の為に斯く多 さゞりしに先ごろ長崎に在留の魯国人が残らず買取り 商ひ高 なりしと頃日 ハ凡そ五十万円 数 出 の石炭を買込みしものか孰れ 京の長崎人の なりと云ふ蓋し清国 一咄せり にも坑 浦 との 潮期

東京日々 明十三・十・五

居る様子なれバ立帰らんと4 せしかど然とて此まで来しものをと思 京 して棄て措きたるがたゞ去る十一日の扶桑新誌に云へる我らが藤田 ○二三日前に後藤象二郎君 き様もなくまた同人にハ実に数年来面会せず又た上京の後ち大隈 取次して云ひ入れたるに頓て面会ハしたるものゝ唯だ時候の寒 取立てたる炭坑とハ 鮎 ~と記したるハ人を誣るも亦た太甚だしとや云ふべき今たび我 を密議したり又我が上京ハ夫のみならず高島坑にハ兼て鹿児島 上京するに神戸にて二日ほどの船待すれバ其間に兼て好める西 加 通り ・密事を議したりと云ふも是また訛りにて去月の十五六日にか 遂に大坂へハ得寄らずされバ鳥尾に遇て藤田 札の 附てハ毀与褒貶百出 船の出帆すると云ふに驚かされ又3汽車にて急ぎ神戸 を試みんとて汽車にて赴きしに其日に電報ありて兼て れば此ほと官途に紛議の起りしを幸ひ夫をも政府に持出した 入するが近来長州人の取立たる石炭坑の兎角に我が炭坑の邪 れも歯牙に懸るにも足らぬ浮説なれバ耳辺の蚊擾とも聞 、なる邸を音信しに折ふし門前にハ車馬充盈て来客の込合ひ 演しのみにて十分間とハ語らざりき又た新誌に云ふ長州 確証を大坂なる鳥尾より聞得て告発する為に上京し大隈 想ふに三池のことなるべし元来我が高 0 して様々の事どもを新聞紙にて云ひ触せ 我が社長を訪べれし 折り近来我らが身 組の事実を聞得 、ヘ下り の期 做す ょ

を恨 まで るを得ず よしとする市井の小児と同じからざるハ少しく世間 を諒すべく他の艱難を時として不義の利を謀り人の罪悪を発きて むとの一 評 る人ゝが時勢を知らず事 りと歎息して語られたれバ社長も我が同業にて自から新聞記者と誇 ろなく遇ねばならぬ人にすら未だ遇はず誠とに迷惑千万の事ども また談話 其前後の横浜毎日新聞にも我らが大隈と再三 たる男ならぬハ老兄も能く知る処ろならん我ハ我が栄誉を傷は る妨害をあたふるとも其が艱難を機として弱みに狙込むが如き卑 訐きて人を罪に陥れんとする残忍の人にあらず又我が営業に 起るべき様もなく商売の妨げをなす筈もなし殊に我が L 此 ふること 右の咄 如く痛くもなき腹を探られて世の中の疑惑を来すことの否さに拠 熟知する処ろなるに斯る訛伝を信じて紙上に筆するは畢寛意を用 局量大いにして小事に蜒蜒せられざるハ従来の事業を見てもこれ 我 の三 を下だし其所行をすら是非するハ尤も片腹 社員たるもの一人も無きハまた此 何事をか密議せしなど載せたれども其はた痕跡のなき訛聞 むにあらず世の記者が余りに人物を知らざるを憫れむの は 我 池とハ炭 段にいたつてハ貴下と同感に候と答へたるよし抑も後藤 O もあり旧 しにて明かなり我らも が売捌をなして初より相関からずさ 粗なるに出でし過ちか我〻ハこれらの記者の為に惜まざ 虚実ハ右の如し我ら不敏なりとハ雖ども亦た他の 質 の異 知巳朋友なる当時の参議を音信んと思へども右ら なれ 実を知らず人物をも知らで濫りに バ用所も亦た異にして彼ハ彼が 一年振にて出府したれバ用事もあ 事の謬説たるを証明するに足る |出会して或ハ夜に入る 痛きことにて其愚を憫 ħ ば彼此 と交際はるも 社 の間 に鹿児島 事物の論 し如何 みまた 隠悪を た ts

京 十三・十一・八

出 \bigcirc にハ坑夫が俄かに沸騰し少く放火せしが未だ鎮静の模様知れざるよ 去る五 火し火勢猛烈いまだ鎮火の模様なしとの届けありしと又た某新聞 届けありしと見えたるが何れが信なるや 日長崎県より電報にて昨夜午後九時ごろ高島石炭坑内より

京 日 明十三・十一・

其 ħ 届 O ħ 信を措き難きものか 、余の事ハいまだ何とも申来らずとの返答なり然らバ此の風聞も未 との趣きを世間にて云ひ触らすに付き本社より三十間堀の炭坑舎 バ余義なく銃器を用ひて漸くに威し付け上陸して専ばら鎮撫中な しに暴徒ら其の来るを覗ひ海岸に出でゝ瓦石を投げ上陸を防ぎた |かざる旨県庁へ報知せしかバ直ちに数十名の巡査を出張せしめら **暴発にて坑工の器械を毀ち所ゝに放火し詰合の巡査にてハ制圧の** 合せたるに前の工夫暴動云くの事ハ長崎より電報ありしかども 島炭坑の出火の電報ハ前号に記せしが猶ほ聞くに右ハ全く坑夫

東京日 明十三・十一・十二

斤八円 田 0)横浜居留の支那人へ先頃より千葉県下の海浜の村らへ人を出 作を買締ることへ夥しき金高なるが夫故に昨今田作ハ払底にて百 |を買入れて本国へ輸送するもの多しと聞けり 余の直段なりと又た同国人ハ茨城県下久慈郡内 Ø 山より して 出

十三・十

高島炭坑の 藤象二郎君 事 件 1八一昨 に附てなるべ 日出帆の隅田 L 丸にて長崎へ赴 かれたり多ぶん

東京日 明十三・十一・廿六

工を竣れりと云へり手宮より幌内までハ大約廿三里の地なるにその 廿四日に其筋へ達したる電報にてハ既に札幌の空知通りまで架設の 一日より汽車の運転も差支へなくなりたる趣きに聞き居たるが一 ○又同使にて幌内炭礦の為に架設せらるゝ鉄道ハ小樽港の手宮とい ふ所より工を起し最はや星置まで成就し手宮より銭函の間に本月の 昨

東京日 明十三·十一·廿

半途まで成就したるハ迅速のことゝ云ふべし

堀に着手せしもあれバ去る廿二日社員一同集会して開鉱式を執行せ 憂へて先頃より地方の有志者と謀りて資金三万余円にて潤国社と云 盛大に至らば人民の便益は大かたからさるべしと同地よりの報知 ふを設け社員を四方に出して廿余ヶ所の炭鉱を買入れ其うち既に開 ○三重県下安濃郡綿打町の三好某ハ我国にて石炭の需用すくなきを しとのことなるが元来勢州地方ハ随分炭鉱に富みたれバ後 **ら此業の**

東京日 々 明十三・十二・三

ŋ

るが則ち同鉱山払下の事に付工部省より太政官へ伺中なりとその ○諸省附属の諸工場のうち御払下を願出たるハ末だ三池 願者ハ大坂府平民某3等数名なり と聞 けり

み

東京日 明十三・十二・七

質も良く出高も多く我国にて屈指の良坑なれども年来の大借なる上 近く処刑になるべしと聞けり扨この暴動の原と云ふハ元と同坑ハ炭 ○先ころ高島炭坑を騒がせし坑夫 弁に其巨 一魁ども彼の り召捕れ

ぎ立てたれば残る者どもゝ其尾に附て暴れ出し竟に斯る騒動に及び 銭 外 5 櫃 换 会計もや」立ち掛り 用 るべしと云へり我 ŋ に たるなりとい より雇入れなどして専ら冗費を省くことをのみ要としたれべ社中の 社 て 商 を攫ひ他郷へ走らんなどゝ諜し合せて或る夜坑内に火を放ちて ĸ れて無体に我らの雇賃を減されてハ食ひ続けずされバとて穴堀の が廻るぞ早く身の用心せよと云ひ触らせしに坑夫どもハ鈍くも謀 へ品を替へ坑夫を煽動して今に貴さまらの方にも滅給と放逐のお Ø く依て去ころ社則を改革して在来の雇人の中にて懶惰のも 近 て廃業などの不幸を見ざるべきを願ふのみ 中の有力者が非常の力らを尽すにあらざれバ維持方ハ甚だ難か 折角の改革も其功を見るまでにハ余程の骨折なるべし到底此上 売向の事に付きても競争する事あり或ハ妨障をなすことなどあ 身過をすべき仕事もなしいつその腐れ騒動を始めて其紛 人員等を放逐し或ハ减給しまた用便に足るべきものを東京横浜 来上海その外にても石炭相 ふされバ此 々局外の者とい たるに右の放逐滅給等の者がいたく恨みて手を の暴挙の為に炭坑舎の 場 の下 へども日本の為にハかく坑山の 落したるより維持の方六づ 損失も少な からず殊 れに金 め 又不 騒 か

> ず が らず又同社の会計をして此暴挙の為に弥4窮困に 東洋第一の炭坑を空しく廃業に至らしめんかと痛歎するもの かしき景況ありされば今非常の施策を以て挽回するに非ざるより 艱難ハ更に一層を増して尋常の考へをもて見る時ハ迚も維持方の六 K 大なるも元利金の返済に逐はれて其困難謂ふべからざるもの に創立以来百余万円の大借あれ、社主社員みな其人を得て坑業の盛 方 所 此 、筋にて召捕られ昨今糺間中とのよし抑も此社全体の盛衰を論 | へ漕去りたるが此に乗後れたる者(此中にも巨 実ならバ 々に た日 .の暴動一件に付てハ殆ど十万円にも及ぶべき損害を受けたれ 放火し其紛れに頭立たる者五六十人ハ小舟に乗りて沖の島 本全国財政上の罪人とも云ふべきか かの坑夫らを煽動せし者どもは独り坑主の罪人のみなら 至ら 魁あり) しめし 数十人を と云 少な あ り殊 뱐

|京日々 明十三・十二・廿

今 社 ま を 春以 四 .是までの如き私利を営むを得ざるより竊かに坑主を恨みて役夫ら 先に高島炭坑 員の住宅に乱入して金庫を開き衣類その他目欲し た社員役夫等をも黜陟せしがその不正にして黜けられたる輩 Ŧī. 動 百 し終に此 来坑主後藤君が長崎に出張 人が 手ょに得物を持て坑外の機械を打毀 暴動の の暴挙をなさしめたるなりと云ふ其折の景況へ坑夫 願末を略記せしが其原固ハ矢は して大に 社則を改 以し同社 き品 ため悪弊を除き ŋ 前 の出 うを奪ひて 記 張所と の 八其 如く